
ひぐらし・・・の？

瑠璃@

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ひぐらし・・・の？

【Zコード】

N1501M

【作者名】

璃瑠@

【あらすじ】

ひぐらしのなく頃に、繰り返し起きる惨劇。
しようと、奮闘する一人の少年の話。

それを回避

作者は原作はやっていないので、そーいうのが嫌いな人は見ない
ほうがいいですよ。

其の壱 記憶（前書き）

こんにちは、瑠瑠@です。

なんで突然――

次創作を書き始めたかといつと、なんとなくとしか言えませんw
もう一つの小説ですが、4回ほど制作途中のデータがとんでもやる気がなくなつたので、やる気が戻りしだい再開したいと思います。

さて、いつに

なるやう。

ちなみに設定としては、祭囃しに近い状況で惨劇を止められなかつた次の世界を舞台としております。

では、前置きはこの辺で

「ぐすぐす・・・・残念だったわね。さよなら、圭一君」

そう言つて、彼女。鷹野 三四 たかの みよ さんは銃の引き金を引いた。

俺はゆつゆつとせまつてくる弾を田で追しながら、先に逝った旨に詫びる。

「・・・・・・」めん、な

最後に見た景色は、茜色の空をバックに不気味に笑う三四さんと、血飛沫をあげる自分の身体だつた。

・・・つて、アレ? 今のは夢か?

俺は頭をぱりくくりとさせながら、よく見覚えのある自分の部屋にいる」と心づけ、安堵する。

それについても何てリアルな夢だつたんだ。

・・・・・本当に、夢だつたんだよな？

俺は鮮明に思い出せる記憶の糸を手繰り寄せながら、眉をしかめる。

梨花ちゃんが変な病気の女王感染者。

山狗やまいぬと呼ばれる部隊。

そして、“何か”にあらがおうとした俺たち部活メンバーは、診療所の看護婦である鷹野三四さんに殺された。

断片的ではあるが、とてもリアルで生々しい記憶。

「やつば、夢だよな

俺は苦笑しながら、頭をグシャグシャと搔く。

こんな平和な村で、あんな事があるなんて信じられない。

それに、銃で撃たれたはずの俺自身が今いせりへて生きてること。

これが、やつばの夢であるといつての証拠だ。

「圭一、早くしないと、レナちゃんもつられて...」

「わかったーーすぐ行くから

俺は今から聞くべき母との声に返事をするべく、学校へ行くための準備を急いだ。

「圭一君。遅いよお～」

「ああ、悪いな」

俺が着替えて下の階に降りると、学校のクラスメイト、竜宮りゅうぐう レナがいた。

なぜか、ちやつかり食卓についてるのは何でだ？

「おいレナ。お前、家でも飯食つてきたんだろ？・・・太るぞ？」

？」

俺の母さんからご飯が並々に盛られた茶わんを受け取ったレナは、ギギギギと鏽付いたロボットの如く顔を動かし、俺の方を見た。

「圭一君、誰が太るのかな？かな？」

「い、いや・・・・・」

凄みのある笑顔を向けてきたレナを見て、思わず顔を赤らめてしまう。

「大丈夫よレナちゃん。よく食べて、その分体を動かせばいいんだから」

母さんがそう言いつつ、レナはほつと息をはいて美味しいに食事を始めた。

「ほり、圭一も早く食べなやー」

「お、おー」

俺は頭を数回左右に振り、自分の席に着く。

それにしてもさつきの反応からして、レナが家でも朝食を食つたのは間違いないはずだ。

「・・・・・負けられないぜ」

レナの食欲に対抗意識を燃やしつつ、俺は食事を開始した。

「やべえ・・・げふっ・・・もう、食えねえ」

「あはは。圭一君無理しそぎだよ〜。でもしゃしゃき動かないと
ね。魅いちやん、待たせてるんだから」

「や・・・鬼畜め」

俺は今にも食べ物をリバースしそうになつていいのに、そんなに早く歩けるわけないだろ〜。

「ん〜・・・いつこいつは腹を刺激してやればいいのかな?かな?」

「こやこやーそんな」としたら吐くだろーー!」

俺は責めながら、何かを殴るそぶりを見せて『いるし』を落ち着かせようと焦る。

たぶん今殴られたらリアルにリバースするから。

「はうー！怯える圭一くんかあいによおーーお持ちかえりいーー！」

「待てーーみんなー俺のお腹にこれ以上の刺激はマジでヤバいからー」

「・・・・・一人とも、遅いと思つたら・・・・・」

俺に襲い掛かるつとしているレナの後ろで声がした。

声の主は園崎 魅音 そのれや みおん。

レナと同じくクラスメイトで、俺たちの“部活”の部長でもある。

若干、というかかなり不機嫌そうな魅音は、状況を察してくれたのか大きくため息をつきながら、レナに静止の声をかける。

「ほらレナ。学校に遅刻すんよ？それと・・・圭ちゃんの手をい

つまで握ってるつもりなのや」

魅音の声に、ハツと我に返ったレナは、顔を真っ赤にしながら俺にむかってグーパンを放ってきた。

「け、圭一君。大胆だよ、だよ

逃げようとした俺の動きを封じるためかはわからないが、手を握つてきたのはそっちからだろ・・・。

可愛いモードに入ると、周りが見えなくなるのはレナの悪いところだ。

「レナ、相変わらずいいパンチしてるねえ・・・。ひ、圭ちゃん、急がないと本当に遅刻するよ」

「はう~。ま、待つてよ魅いちやん~」

地に伏せた俺を放置して、レナと魅音は走りだした。

・・・・・うん。離見沢は今日も平和だ。

慣れてしまつた理不尽に苦笑しながら、俺は一人の後を追つた。

俺は教室のドアに手をかけ、ゆっくりとソレを開いて――――――
――ドカッ！

（こな場合、俺はどうすればいいんだ？）

しかし、俺も男だ。

毎度のことながら、日に日に魔の危険度が酷くなっているし、そろそろ魔をしかねん。

遅刻、ギリギリに教室の前へ着いたはいいが、見るからに魔が仕掛けられているドアの前で立ち往生しながら、俺は悩む。

顔面に強い衝撃を感じた。

(ああ、これはダメだ)

吹き出す鼻血とともに、俺は意識を失った。

「こんな・・・じゃない条件の世界でも、運命には打ち勝てないの？」

誰かの啜 すす り泣く声が聞こえる。

「の声は・・・間違いない。梨花ちゃんだ。

「ねえ、羽入。あなたが協力してくれたこの世界でもダメだった。

赤坂もいる。鉄平はいない。誰も疑心暗鬼にならない。こんな・・・
・こんな世界でもダメなんて、本当に運命は打ち破れるの？」

「あう・・・・・」ごめんなさい梨花。ボクには、わからないのです」

「あらあら、二人とも待たせたわね」

梨花ちゃんと……………そうだ、羽入。

一人の声に混じつて、鷹野さんの声が聞こえてきた。

場所はどうやら、古手神社の境内のようだ。

梨花ちゃんと羽入は、手足を縄で縛られている。

「さあて、一人にはこれから死んでもらうわ」

狂気じみた笑顔で笑う鷹野さんの手には、一本の鍬くわが握られていた。

『おこ・・・・・せめりつてーー』

俺は力の限り叫ぶ。

しかし、それが届くことはない。

「じゃあ、やよならね」

鷹野さんは手に持つ鍔を振り上げ、梨花ちゃんのお腹辺りを狙つて振り下ろした。

「…………はあ、はあ……」

俺は息を切らしながら上体を起こした。

ズキッ。

額ひたいの辺りが痛む。

どうやら俺は、何かが顔に当たつてそのまま学校で気絶してしまつたらしい。

鼻に薬品の匂いが付く。

「おやっ、前原さん、目が覚めましたか」

「どう言って、俺の顔を見ながらニコニコと笑っているのは入江先生」と、監督だ。

監督つてのは、ただたんに野球チームの監督をしていろからそういう呼んでいいだけなんだが。

「どうしたんですか？ そんなに汗をかいて」

そして、監督はその笑顔をすぐ隠し、本職の医者らしい真面目な顔で俺を見た。

「…………監督。今、監督以外に誰かいる？」

俺がそう聞くと、監督は、何を言つてゐんだ？ と、疑問を抱いたような表情をしながら首を横に振つた。

「いえ。鷹野さんは所用で出かけてますし、前原さんを診療所まで運んでくれたみんなは学校に戻りましたよ?」

俺はそれを聞いて少し思案したあと、出来るだけ真剣な表情をつくり、監督を見た。

「監督・・・・いや、イリー、話したいことがある」

先ほどの夢で全て思い出した。

この離見沢で起じた、たくさんの出来事を。

“他の離見沢”で自分が犯した罪を。

そして、これから起じるであろう“惨劇”の犯人を。

前の世界で梨花ちゃんは言つた。

『私は百年もの間、何度も何度も、惨劇を繰り返し体験した』と。

俺だけに、悲しげに言つてくれたその言葉は、心の奥に刻まれてあ

る。

今度は、絶対に助けてやるぞ。

そのためにも、やむを得ないがたぐれとね。

其の壱 記憶（後書き）

どうでしたか？

原作をやってない身で書く無謀さは、妄想でなんとかカバーしていきたいですね。w w

とりあえず、おかしな点があれば、ド

ンドン指摘してくれれば嬉しいです。

其の弐 めあなたの言葉があつたから

「…………そんなことが…………信じられません」

俺の話を聞いた監督は、ありえないことばかりに首を左右にふる。

「でも監督。俺が雛見沢症候群について知っている。山狗についても知っている。これだけでも信用に値する価値はありませんか？」

俺がそうこうと、監督は唸つた。

「…………しかし「監督ッ……」

どこか煮え切らない態度の監督に、俺は思わず声を荒げた。

「俺の話は信じなくてもいい。けど、仲間の命がかかつてゐんだ！
！お願いですから力を貸してください……！」

俺は頭を下げる。

犯人等についての記憶があつたとしても、俺一人では何も出来ないのだ。

「…………わかりました」

監督は渋々といった感じでうなずいた。

「…………他に信頼出来る人は誰なんですか？私からも声をかけてみましょ！」

「あ、ありがとうございますーーー！」

「…………まあ、気にしないでください。梨花ちゃんや沙都子ちゃんを守りたいといつ気持ちはよくわかりますし、それに、前原さん…………いえ、Kの頼みとあれば無下に断れません。鷹野さんが何か企んでいるというのは、薄々気付いていましたから」

俺は再度お礼を言つと、右手を差し出した。

「これから、よろしくお願ひします。監督」

「はー。」前原さんへお願いします、前原さん

俺と監督はがつしりと握手をした。

例の計画が実行される綿流しの祭まであと3週間もない。

力ナ力ナ力ナ力ナ。

診療所の外では、ひぐらし達が静かに鳴き始めた。

診療所を後にした俺は、次なる仲間を集めるために近くの電話ボックスへむかつた。

自慢ではないが、こんな俺に協力してくれそうな人はそうはない。

監督と、あと二人。

心の友と呼べる人はあと一人しかいないのである。

しかし、俺はその一人が運命にあらがい、惨劇を打ち破る鍵になると知っている。

「…………もしもし」

『はあい。…………おんやあ、その声は前原さんですねえ?』

運良くその人物が電話してくれた。

俺は受話器を握る手に汗をかきながら、口を開く。

「大石さん。雛見沢の“鬼隠し”について話したいことがあります。どこかいい場所はないですか?」

ガタツと椅子のようなものから勢い良く立ち上がる音が、電話越しに聞こえた。

『…………今、どこですか?』

俺が現在地を告げると、すぐに行くから待つていろと指示を受けた。

田舎道を、すんごい速さでとばしてくるパトカーが見えたのは、電話をかけてから10分も経っていない頃であった。

俺と大石さんは、場所をパトカーの中に移し、話の続きを開始した。

大石さんの表情は真剣そのもので、俺の喋ることを聞き漏らすまいと耳をたてている。

「なるほどあ・・・にわかに信じがたい話ですが・・・わ
かりました。ワタシも協力させてもらいます」

「本当ですか！？ありがとうございます、大石さん！」

俺が勢い良く頭を下げるが、大石さんは苦笑の笑みをこぼした。

「いえいえ……むしろ感謝させてほしいですねえ。敵討ちのチャンスを与えてくれるんですから」

「敵討ち……？」

「……ええ。実は、その鬼隠し事件の最初の犠牲者がワタシの父と呼べる人でしてねえ……どうにかして解決しようとは意気込んでたんですが、いかんせん、その糸口すら見つけられず、ワタシももうすぐ退職ですから。わらにもすがりたいような気持ちなんですよ」

俺は大石さんの悲しげな顔を見る。

「大石さん。絶対に、次の犠牲者は出さないようにしましょう」

「ンツフツフ……当たり前じゃないですか前原さん。大石 蔵人 おおいし くらうど、警察人生をかけて前原さんに協力することを誓いますよ」

監督の時と同じように堅い握手を交わし、俺はまた一人信頼出来る仲間を増やした。

俺はパートカーから降りて、大石さんに手を振る。

「おやつさん。あなたの敵　かたき　は、必ずとつてやりますから
ねえ」

そんなことをぼやきながら去つていく大石さんに一礼した俺は、夕方になり茜色に染まつた空を見上げながらそつと息をはいく。

こんな俺の、妄想としか思えない話を信じてくれた二人に感謝をして、俺は帰路についた。

家に帰つた俺は、晩飯と風呂を急いですませ、部屋に閉じこもつた。

一人に任せてばかりではダメだ。

俺に何か出来るの?」と・・・・。

色々思案してみるが、妙案は浮かばない。

「やつこえば・・・・」

やつこえば、羽入はこの世界にはこるものだらつか。

彼女が実体化したのは、思い出せる限り2回程度だ。

きっと羽入も、運命を打ち破るための大きな鍵に違いないんだが・・・。

「ああ……やつこえうー句でこの世界の記憶がないんだよー。」

そう。何故かはわからないが、この世界の、あの夢を見る前の記憶がまったくといつていいほど無いのだ。

「みんなに聞いてみるか?いや、そんな」としたら、すぐに病院に連れてかれるだろ。うーん・・・・梨花けやんに相談してみるか?」

「みい、ぼくに何か用なのでですか？」

いつのまにか俺の死角に立っていた梨花ちゃんを見つけて、俺は布団から飛び起きた。

「圭一が沙都子のトラップに引っ掛けられて入江のところに運ばれたから、みんな心配していたのです。それで、罰ゲームになつたぼくが、いつやつてお見舞いにきてやつたのですよ。」
」

につひとつ笑う梨花ちゃん。

確かに梨花ちゃんが現在 いま 着てる服は、可愛いゴスロリで俺の萌え心をくすぐるが・・・・つて、ちがあああう！

いや、違わないけどさ・・・確かに梨花ちゃんが可愛いのは認めよ。それよりも・・・。

「もしかして、俺の独り言聞いてた？」

「ぐんと頷く梨花ちゃん。

・・・・・まあ、いいか。手間が省けた。

「なら、単刀直入に聞く。羽入はこの世界にいるのか？」

俺がそう聞くと、梨花ちゃんは暗い顔して俯うつむいた。

その様子から察するに、どうやら羽入は・・・・・。

「残念ながら、この世界に羽入はいるわ。・・・・・私が大事にとつておいたプリンを食べた、あの忌々しい羽入め・・・・・」

「ガガガガ」と、田には見えない威圧的なものを放ちながら、梨花ちゃんが舌打ちをした。

俺は苦笑しながら立ち上がり、梨花ちゃんの頭を撫でる。

本当の梨花ちゃん、通称黒梨花の状態で話してくれたことが嬉しかったからだ。

前の世界で、本当の姿を見せるのは限られた人だから、と、俺のハートを射ぬくよつなことを言われたのを思い出す。

「圭一は、前の世界のことを？」

「ああ、覚えてる。もちろん“惨劇”の犯人もな

俺がそう言つと、梨花ちゃんはにつこつと笑つて、すぐに表情を引き締め俺の手を頭の上からはらつた。

「ふ、ふんつ！べ、別に嬉しいわけじゃないんだからね！」

「あうあう～。梨花は素直じゃないのです。前、死ぬ直前に圭一の名前をふぐうつ！？」

「どこからともなく出現して、僅わずかに喜ばしげに語つている羽入の口を梨花ちゃんが塞いだ。

「い、の、馬鹿つ！あ、あとでキムチの刑決定ね！」

俺は首を傾げながら、二人のじやれあいを見て笑う。

羽入も罰ゲームを受けたのか、梨花ちゃんが着ている黒のゴスロリとは反対の色、白のゴスロリを着ていた。

とりあえず、この世界にもまだ希望はあるってことだよな。

そうと決まれば、やる」とは大体決まった。

たと、鷹野さん。

覚悟しちゃよ？

「具体的には、どうするつもりなのですか?」

「ああ、そうだな。…………といふえず、信頼できる仲間を集めよ」と思つた。

「それがいいのです。それにしても……………クスッ」

梨花ちゃんと羽入のじゃれあいが終わった後、とりあえず惨劇に打ち勝つための作戦を立てことになった。

そんな話し合いで、羽入が嬉しそうに笑いだす。

「何がそんなにおかしいんだ？」

俺が質問すると、羽入はなお一口一口と笑みを深くした。

何がそんなに嬉しいのか。

「前の世界では、惨劇に打ち勝つための条件は十分なほど揃っていましたのです。けれど、ボクたちはそれに負けました。・・・・・。この世界に来たばかりの梨花は、それはもう落ち込んでいたのです」

「ちょ、羽入！」

俺は話の続きを聞いたかったので、羽入を止めようとして立ち上がった
梨花ちゃんの手をとつてソレを止めた。

「梨花はボクに言ったのです。『もう、何をしても無駄なのか』と。

梨花がボクや沙都子の田を盗んで泣いていたのも知っています。だから・・・・・だから、今しゃつやつて楽しそうにしている梨花を見るのは、とっても楽しこのです。」

羽入がやつぱりと、梨花ちゃんはどうか照れたよつぱりふりきりぱりに座り、そっぽを向いた。

「・・・・・・・・・の、一応心配してくれてありがとうございます、羽入。・・・・それと圭一」

「ん? どうした?」

「ぼくが元気になれたのは、圭一が前の世界でぼくにかけてくれたのが大きいのですよ? あの一言がなかつたら、ぼくはあの世界が終わつた時点で諦めていたと思います」

俺は自分の記憶を辿り、恥ずかしさのあまり赤面した。

「・・・・・俺は小学生相手になんてことを言つたんだ・・・・・」

「うだな。あの言葉は、所謂 いわゆる “痴女” といふやつられるものかもしれない。」

「あ、あう。ボクはソレを聞いてないのだとでも仮定するのです」

「ほり圭。今、この場でもう一度言つてしまひます。あの言葉が嘘じゃなかつたつて証明してほしのです。にほへ」

ぐつ・ぐつ・梨花ちゃんの笑顔が黒い。

絶対楽しんでやがる。

はじまあ、あと一度へりこないうまつてしまつてもいいかな。

梨花ちゃんが俺の言葉で救われたのなら、それほど嬉しことせないから。

だからもう一度だけ。

俺は立ち上がり、梨花ちゃんを立たせる。

その肩に手を置いて、決心とともに声をあげた。

「梨花ちゃんは俺が守るからー。きっと、きっと、俺が死んでしまつても、また次の世界で梨花ちゃんと会つて、んで、全力で守つてみせるーー。」

少し台詞は違うかもだけど、確かにこんなことを言つたはず。

・・・・アレ? 梨花ちゃん、顔を真つ赤にしてフリーズしてゐる?

言つた俺も恥ずかしかつたが、言われた本人も相当だつたに違ひない。

「あうーー! あう あうーー! 告白なのですーーついに梨花にも春が来たのです!」

騒いでいる羽入は放置。

つか、母さんと父さんに聞こえてないよな?

・・・・聞こえてたかもつて考えたら、無性に死にたくなつてき
た。

「と、とつあえず圭ーー。」

梨花りゅあんさまズビシと俺に指を立てて、顔を真っ赤にしながら宣言した。

「絶対、絶対、惨劇に打ち勝つわよー。」

「…………わかつてゐよ」

俺は苦笑しながら、了解の意を示した。

其の弐 めなとの言葉があつたから（後書き）

こんにちわ。

さて、圭一のキャラがブレつつあるのはどうしましようかね？ w

もう、後戻りはできないのかな？ w

とりあえず、自分としては惨劇に打ち勝つた後の話を書きたいので、惨劇の内容等については超特急で進んでいきたいと思います。w では、また次回

其の参 大事な話（前書き）

圭一のキャラがブレすぎてる……。

其の参 大事な話

「…………どういふことなんだ？」

目が覚めると、俺の横には羽入が寝ていた。

これは、何の冗談なんだ？

俺はダラダラと冷や汗を流しながら、昨晩の出来事を思い出す。

確か、梨花ちゃんと羽入との三人で色々話しあつたんだ。

それで、夜も遅くなつてきて沙都子が心配するといけないからと、二人は帰宅したはず。

…………うん。間違いなく羽入は梨花ちゃんと一緒に帰つたはずだ。

それなのに、この状況はなんなんだ……。

「あう～・・・・・もう、食べられないのれふむにゃむにゃ・・・・・・・・・・・・・・

（うおおおおおおおお！何なんだ今のは！！羽入が寝言を言つただけ、俺の萌えメーターがはち切れそうになつたぜ！）

まあ、たぶん、その原因は羽入の着ている服に問題があると思つ。

昨日の夜まで着ていた白ゴスロリではなく、寝やすそうな薄着一枚なのだから。

チラチラと見える羽入の肌。見えそつで見えない太ももの先の神域。

この状況で萌えない、いや、燃えない男がいるだらつか？それは否だ。

男たるもの、この状況を楽しむなれば揃も揃。大揃である。

「・・・・・・・・・落ち着け前原圭一。クールになるんだ」

俺は自分の高ぶる気持ちを抑えつつ、邪魔が入らないように部屋のドアから顔を出し、キヨロキヨロと様子をうかがう。

今日は何故か早く起きたので、まだ朝食までには時間がある。

つまり、母さんの邪魔はないと考えていい。

問題は父さんだが、見つかつたら見つかつたで許してくれそうな気がするので、問題なしとしよう。

俺は自然とやけの頬を、必死で抑えようとするが、まあ、無駄である。

「ああて、ぐふふふ。俺はこれから惨劇に挑まなきやならないわけだし、きっとこれは神様からの贈り物に違いない」

はあはあ、と息を切らせながら羽入に近づき、睡をのむ。

そしてゆっくりと、羽入の肌へ手を伸ばして————「圭一、何をしてるのですか?」

ゆっくり振り返ると、開かれたドアの向こうには、息を切らしながら、苛立つたような表情をしている梨花ちゃんがいた。

「…………といつわけなのです」

「な、の、で、す、じやなあああああああい！…そこで、何で寝ちゃうのよ馬鹿羽入！」

「ぱつ、馬鹿はひじこのです！今すぐ訂正してください梨花！」

「騒ぎだす一人に変わって今朝の状況を説明するといつだ。」

羽入は、俺にどうしても伝えたいことがあって、梨花ちゃんと沙都子が寝静まつてからこいつそりと俺の家に来たらしい。

「どうやって侵入したか、までは教えてくれなかつたが。

んで、俺の部屋に入つたはいいものの、俺は爆睡中。つらわれのよう

に羽入も寝てしまった、と。・。・。・。俺の横で。

そして梨花ちゃんはと黙つと、朝から沙都子に叩き起しきれてみれば、羽入がいなくなつていて、『なんとなく』俺の家に来た、といつことらしい。

沙都子には心配するなど言つてあるから大丈夫と梨花ちゃんは言つてるが、本当に大丈夫だろ？

まあ、沙都子のやつは小学生の割にこなしつかうしてゐるから、大丈夫だよな。

「どうあえず羽入。あんたの言いたいことはわかつたわ。それで圭一。あなたはわざ何をしようとしてたのかしら？」

梨花ちゃんが修羅のような顔で睨んでくる。

つか、小学生相手にビビつてゐる俺つて・。・。・。

「あう。ボクも圭一が何をしようとしてたのか気になるのです。確か圭一は、そこのドアから顔を出しながら、『ぐふふふ・。・。』つてニヤニヤしていたのです。それで圭一はボクに少しづづ近づいてきて・。・。・。あう」

かつちの光景を思い出したのか、羽入の頭から湯気が吹き出した。

顔は熟れたトマトの赤く真っ赤である。

「ば、馬鹿っ！俺はそんなこと」

「本当に、してないの？」

なんとか言い訳を言おうとした俺に、梨花ちゃんがズイッと体を寄せて、先ほどより強く睨んでくる。

だあああああ！梨花ちゃんは何をそんなに怒ってるんだ！？俺、何かまずいこと・・・まあ、俺が羽入にしちゃったこと多め少まずつたかもしれないが・・・。

てか、羽入。起きてたのか・・・まさか、やつも頭の中は真っ黒クロスケか？

それで俺を陥 おとしい れて楽しんで・・・いや、魅音や梨花ちゃんじやあるまいし、それはないよな？

とりあえず、今はこの状況をなんとかしないと……。

俺は頭をフル回転させて、言い訳を考える。

今こそ、口先の魔術師の実力の見せ所じやないか。

「圭一君。朝っぱらから、部屋に女の子を一人もつれこんで何をしてるのかな？ かな？」

「圭一さん、不潔ですの」

そんな処刑宣言 ことば
が聞こえてきた俺は、瞬時に両手をあげ
てギブアップを示す。

そして、熱い魂の叫びを口にした。

「男がエロくて何が悪いんだああああああああああああああ！」

直後、レナパンという台風が俺を襲ったのは言うまでもない。

「な、なあ～んだ。そういうの」となり早々と聞いてくれればよかったです
「ここ

羽入が事情を説明すると、レナは納得顔で頷いた。

説明なんてする間もなく、ものすごいストレートを放ってきたのは
どこのどこのどいだよ・・・。

「うー、めっちゃ一君。レナのこと嫌いにならないでね？」

「なるわけないだろ？心配するなよ」

いや、まあ、上田遣いで頼まれちゃあ括弧なんて出来ないよな。

つか、俺の中でレナはいつだつてわかつわつてゐるかい。

別の世界の記憶がある俺からすれば、レナは恐怖の対象でしかない
し。

まあ、友達だとは思つてゐるだけだ。

「どうあれ、いつも飯食つて学校に行つた。懸念も待つてゐ
だらつ」

「せうですわね。どうか圭一さん。あなたのせいでワタクシヒル
ナさんは朝食を食べてないんですよ。」

「……俺のせいかな？」

「あ、あ、あ、ボクもお腹ペコペコなのです〜

「圭一、毎朝の分の朝ご飯も用意してもらひますですか？」

そんな梨花ちゃんの提案に、俺は首を縦に振る。

幽さんの「ひとだからいいせ、みんなの分も」飯の準備をしてるに違いない。

魅音だけ仲間はずれにして悪いが、みんなで「飯を食べるとするか。

「圭一、みんな、」「飯出来たわよ~」

そんな幽さんの声が聞こえてきたのは、それからあぐの「ひと」だった。

「ふ~ん。おじさんだけ仲間外れにして、みんな仲良くなつてわけかい

いつもの集合場所へ行つたとたん、魅音は俺たちを見るなつて言った。

あからさまに不機嫌である。まあ、でも、たまたまこいつなったわけ
だし、仕方ないよな？

つていうか他のみんな。

なぜ俺をジト目で見つめるんだよ。

別に俺だけが悪いってわけじゃないあ……。

「さて、井上ちゃん。詳しく述べてもらおうか

「…………」

俺は渋々事情を説明する」と。

所々で茶々を入れてくれる梨花ちゃんと沙都子。

まじで勘弁してくれ。

「…………やうとなら、仕方ないけどな」

説明し終わると、魅音はプリッシュを向いて歩き始めてしまった。

「あ、待つてよ魅いちゃん！」

その後を追い掛けるレナ。

それに沙都子と梨花ちゃんが続く。

俺も追い掛けようかと足を踏み出すと、羽入が俺の服の裾を掴んできた。

ちなみに、羽入の服装はちゃんとした制服である。一旦着替えて寝つたせいで、この場所に来るのが少し遅れたのだ。

「どうした？」

俺が質問をすると、羽入は真剣な顔をしながら口を開いた。

「圭一に話したいことがあるのです」

「そりいえば、羽入が家 うち に来た理由は、その話とやらが目的だつたな」

「あうあう。ボクがこれから語るのは、鷹野の“過去”についてなのです」

鷹野さんの過去か・・・・・確かに、あんな事件を実行するのは相当の覚悟と勇気が必要である。

気にならないといえば嘘だ。

「わかつた。聞かせてくれ、羽入」

今日も学校はサボることになるけど、離見沢のためだ。

少しくらい大目に見てくれるよな?

其の四 開戦（前書き）

原作崩壊 w 設定とかが全然わかりません」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」「めんなさい」

其の四 開戦

「そんなことがあつたのか・・・・」

俺は羽入から話を聞いて、眉をしかめる。

鷹野さんが小さい頃に体験した、壮絶な運命。

それは想像も出来ないほど辛いものであつたと、安易に予想が出来る。

人気のない、古手神社の境内で、俺は鷹野さんにに対する考え方を改めた。

ただの敵から、別の、ある意味惨劇といつてもいい運命に至められた鷹野のさんを救つてあげたいとすら思い始めていた。

「圭一は、優しいのですね

俺がその気持ちを話すと、羽入が嬉しそうに微笑んだ。

「いや、さ。俺も鷹野さんも他のみんなも、同じだなあって思ったから。俺たちだけ惨劇を回避出来ても、誰か一人が苦しんでたら何の解決にもならないだろ?」

前の世界でも、ほんやりとではあつたが、別の世界での記憶があつたのを思い出し、苦笑する。

惨劇、雛見沢症候群といつ狂気に犯された俺がやつてきた罪は消えることはない。

けど、今だにその狂気に踊らされている人がいたら、手を差し伸べたいと思うのは優しさなのだろうか?

いや、たぶん、ただの自己満足 ハロー にしかすぎないんだろうが。

「違うのです。そう思える圭一は、自己満足主義者 ハロイストなんかではなく、立派な優しい人なのですよ。あうあう

「

「ははは。ならいいんだけどな。・・・・・それと羽入、一つ、頼みたいことがあるんだけど、いいか?」

「

「あう？それは内容によつますですけど…………」

「ああ、それはなー————」

「鷹野さん。少しいいですか？」

さつそく入江診療所に向かつた俺は、入るなり鷹野さんを呼び止めた。

診療所の廊下で止められた鷹野さんは首を傾げながら、俺を見つめてくる。

「ありあ？前原・・・・圭一君だつたかしら？私に何か用？」

妖艶に微笑むその顔は、過去の話を知った今ではどこか寂しげに見える。

「単刀直入に言います。“鬼隠し”を止めてください」

「うー? 何を言つてゐるのかしら?」

とぼけたように眉根を寄せる鷹野さん。

その表情には、少なからず驚きの色が混じつていた。

「俺は全部知つています。“鷹野さんが”やつてきた、鬼隠し、いや、人殺しの数々を」

「いきなり何を言いだすかと思つたら……圭一君、具合が悪かつたりしない?」

「言つときますけど、俺は雛見沢症候群にはかかつてしませんよ?」

雛見沢症候群。その単語を口にした途端、鷹野さんの目が鋭くなつた。

「あなた、どこまで知つてゐるの?」

「そうですね。“だいたい”は知っていますよ？例えばそつだな・・・・・高野 一二三 たかの ひふみ さんのこととか」

「ツツ！…い、入江先生！」

「監督なら呼んでも来ませんよ？理由は・・・・・わかりますね？」

「くつ・・・・裏切られた、といひことね」

高野さんはふうと息をついて、ナース服のスカートを捲り上げた。

思わず目を逸らしてしまいましたが、チラッと黒いものが見えてとどまる。

「計画以外では人殺しをあまりしたくなかったんだけど、残念ねえ」

左手で頬に手を当てながら、右手に持った拳銃を俺に向けてくる鷹野さん。

「そんなことまでして、一二三さんが喜ぶんですか？今の鷹野さんの姿を見たら、一体なんて言つか」

「だまりなさいつ！！」

俺の言葉に、鷹野さんが大きな声をあげる。

「あなたに、平和ボケしたガキなんかに何がわかるつていうのよ！」

「わからないやーーけど、もし俺が一三さんの立場だったら、研究よりも娘のように大事にしていた人のことを優先的に考えるはずだ！鷹野さんは、そんな一三さんの気持ちもわからないのか！？」

「何よ何よーー! どうやって調べたかはわからないけど、私はきちんとお祖父ちゃんの気持ちを理解してるつもりーー。」

「嘘だ！！」

「嘸せじなこ！」

「いや、嘘だね！——さんは本当に、鷹野さんよりも研究を大事にしていたのか？」

「ええ もちろんーお祖父ちゃんはあれだけ必死に研究を続けて・・・
・・・・・あ・・・・・」

「鷹野さんが風邪をひいたとき、一一三さんは何をした？研究を一時中断してまで、鷹野さんの看病をしたんじゃないのか？」

俺の言葉に、鷹野さんが手に持っている拳銃が小刻みに震え始める。

俺は知っているのだ。

羽入から聞いた、高野一一三という人物の優しさを。

一一三さんが死ぬ間際に言った、最期の言葉を。

『三四子・・・・元氣でな』

そり。一一三さんが最期に残した言葉は難見沢症候群のことではなく、紛れもなく鷹野三四さんのことだった。

「そ、そんな・・・・・なら私は今まで何を・・・・・

「別に俺は、鷹野さんが間違っているとか言いたいわけじゃない。確かに親同然の人の望みを叶えたいって気持ちは少なからずわかる。・・・・けど、そのために無闇に人の命を奪つていいのか？そんなの、許されるわけない」

ガチャ。

銃は床に落ち、その音が静まり返つている診療所に響いた。

鷹野さんは両膝を床につけて涙を流し始める。

「監督・・・・」

「ええ、わかつてます」

どこからともなく現われた監督に声をかける。

鷹野さんは今、低いレベルではあるが、離見沢症候群に発症している。

俺みたいなガキの話を真面目に聞いてくれたのも、それが大きいだ

၁၂၁။

まあ、あと少しほ、俺が伊達に口先の魔術師なんて呼ばれてないってことの証明にもなるな。

「どうやら予防接種を施しても、完全に離見沢症候群を抑えるわけではない」とこういっていますね」

鷹野さんの肩を抱きながら、監督がつぶやく。

「なあ、監督。そんなとこをトリーに見られたら」

「富竹フラアアアアアアアアツシユ！」

「ぐわあ！？目、目があーー！」

「だから言わん」いやない

もしもの時のために、富竹さん、もとこ、アリーに待機してもらひつてたのを忘れていたのだろうか、監督は。

「んつふつふー監さんお揃いですねえ」

「大石さん。待ってましたよ」

監督は鷹野さんをトリーに引き渡し、田を擦りながら大石さんに挨拶をする。

「この様子だと、『山狗』にも発症者が出でいらっしゃですね」

もちろん、俺、アリー、監督、大石さんは全ての事情を知っている。

どうやら今回の惨劇 シナリオ は、山狗が悪役のようだ。

けど、これだけのメンツが揃ってるんだし、負ける未来は見えない。

あと、ちやつちやとこの悪趣味な運命を打ち破つてやるやー。

「前原さん。本当に、いいんですかあ？」

俺は大石さんの言葉に頷く。

ずつしりと重い本物の銃を手に、木の影で息を潜める。

これは俺が言い出したワガママだ。

自分の手で終わらせたい。

前の世界で、誰も救えなかつたからこそ、自分の手で。

「死なないでくださいよ？もし前原さんに何かあつたら、園崎の魅音さんにじやされますから」

そう言つて苦笑する大石さんの言葉に、俺は親指を立てて返事をする。

「当たり前ですって。部活メンバーのマスクット的な俺が死んだり

したら、華がなくなりますから」

震える手を隠すように、冗談めかして笑う。

部活の皆は大丈夫。羽入には、俺が危ない橋を渡つてこる」とは内緒にするよう頼んであるし、ここに「おきなく戦えるぞ」。

「わあて、いつちゅやつますかあ

トリーには、鷹野さんが落ち着くまで傍にいてやるよつてある。

俺と大石さん、興富　おきのみや　署の数人と監督。

若干不利な感じはあるが、この方がやつぱり、燃えるよな?

大石さんの一言で、皆は一斉に動き始めた。

「よし、今度こそ終わらせてやる

俺は一人呟いて、白のワゴン車へと銃口を向けた。

其の四 開戦（後書き）

誤字脱字とかあれば、報告してくれるとありがたいです

其の五 終幕（前書き）

展開早すぎる……。どうしてこんなことになったのか、自分で
もわかりません=

其の伍 終幕

「すみません、少しお話いいですかあ？」

団 おとり 役の大石さんが、白のワゴンに近づき声をかける。

相手がどんなアクションを起こすかわからないため、俺は緊張の糸を張り詰めたまま息を飲む。

この場所からじや大石さんたちの会話は聞こえない。

耳をすませながら、大石さんたちの方に意識を集中させる。

パンッ！

銃声とともに、大石が倒れこんだ。

俺はそれと同時に、ワゴン車のタイヤを狙つて引き金を引く。

（・・・・当たれ！）

銃の反動で肩が痛むが、今はそれどころではない。

「大石さん……」

俺は居ても立つてもいられず、大石さんの側に駆け寄った。

「警察だ！投降しろ！」

俺に続き、興富署の人たちがワゴンを囲んだ。

「…………」

しかし、そんなことなど気にしていないかのようにな車は発進した。

車の正面に立っていた刑事さんたちがそれをギリギリ回避する。

「みなさん気を付けてください……もしかしたら彼らは――――――

監督が何か言おうとしたが、それは車のエンジン音にかき消された。

白いワゴン車は少し走ったところでコターンし、アクセル全開でこちらに向かってくる。

「大石さんを！」ひびひー。

「はーーー。」

俺は刑事さんの一人に大石さんを引き渡すと、さつきまで隠れていた森の中に飛び込んだ。

間一髪のところで車を避け、木の影で一息つく。

「いやあ、すみません前原さん。歳はとりたくないもんですねえ」

息を荒げながら、ハハハと笑う大石さん。

その肩からは、銃で撃たれたのか血がとめどなく出でてきている。

「・・・・」のままだと危険ですね

監督は大石さんの肩を見ながら呟く。

「傷は浅いですが、出血が酷すぎます。」そのままでは……」

「大丈夫ですよ、」」」

大石さんは監督の言葉を手で遮りながら立ち上がった。

「大石さん、 しかしつ……」

「んつふつふ・・・・・入江先生・・・・・ワタシはねえ、ここで何もしないで助かるよりも、何かをして死ぬほうがいいんですよ。そうしないと、絶対後悔しますからねえ」

大石さんのその言葉に、俺も監督も、興奮署の人たちですら何も言えなくなつた。

だから俺は、それを止めるわけにはいかない。止めちゃいけないんだ。

キュルルルルッ！

遠くでタイヤの滑る音が聞こえた。

どうやら、先ほど猛スピードで走つてこつたワゴン車が再びローターをしたらしい。

「おや、らくワゴン車の運転手は、雛見沢症候群が発症しています。きっと彼には、私たちが殺人鬼か何かに見えているのでしょうか。・・・・・ 考えたくはないですが、ここに到達している可能性もあるはずです。」

「とにかく止まり・・・・・」

監督の言葉に、俺は思わず舌打ちをしたくなる。

「ええ、彼、もしくは彼らを助けるには、命を懸けて行動しなければなりません」

確かに、話し合いなどは無駄である。

それは何度も、自身で“経験済み”だ。

「ツオラア！…さつさと姿見せんかい…！」

ワゴン車が止まる音とともに、誰かの怒声が聞こえてきた。

「小此木さん・・・・また厄介な」

監督は渋い顔をしながら、声をあげた人物を睨む。

「どうやつ、私たちは山狗全てを相手にしなければならぬよつで
す」

確か小此木さんは山狗のリーダーだつたか・・・・。

「監督、どうするんですか？」

俺は汚い顔のままの監督に質問する。

「どうあえず、この森から出るのは得策でないでしょう。武器の数はこちらが少ぬはずです。・・・・・ そうですね。森に散らばり、

確実に敵を減らしていくのがいいと私は思います」

「んつふつふ・・・・いいですねえ。血が騒ぎますよ」

大石さんはそう言いながら立ち上がり、興奮署の人たちに笑いかけ
る。

「大丈夫です。大石さんにはまだ生きてもらいますから」

「いやあ熊ちゃん。それはそれは。ワタシの背中、任せましたよ?」

さすがだな、と俺は関心する。この人たちは、なんて強いんだろう
か。

「監督、俺たちも頑張りましょっ」

「・・・・・わかりました。私としては、前原さんのような子供
に戦つてもらいたくないんですが、言つても聞かないでしょ?」

「もちろん。大石さんや監督だけにいい格好させられないからな

俺はニカツと笑ってみせた。

本当は、今すぐこの場から逃げ出したいけど、でも、それをしてたら俺はただの負け犬だ。

百年間の借りは、さつちりと返してもうつた。

「では皆さん、準備はいいですか？」

大石さんの一言で、皆が気を引き締める。

「では、行きますよ？」

その言葉で、俺たちは一斉に森の奥へ駆けた。

「居たぞオー！ 殺せエー！」

誰かの怒鳴りが響き、多数の銃声が後ろから聞こえる。

さて、楽しい部活 ゲーム の始まりだ。

しばらく動いていると、小此木さんを見つけた。

「ツツ……」

あらかじめ渡されていた手錠を氣絶した人の手にかけ、次の標的を
目指す。

全て大石さんに教わったことだ。

そして倒れたところを銃で殴つて氣絶させる。

俺は木の影に隠れながら、作業着を着ている彼らの足を狙つて発砲
する。

「…………っしーこれで三人目」

きっと彼をなんとかすれば、この惨劇は打ち破れる。

俺たちは初めて、昭和58年の7月への扉を開けるんだ。

胸が高鳴り、手に汗が滲んでくる。

緊張、高揚、不安。色んな感情が混ざったような妙な気持ちになり、思わず頬の端を釣り上げた。

(これで、終わりだ・・・・・)

俺はしつかりと標的を見定め、銃の引き金を引く。

パンッ！ガササッ！

しかし、弾は小此木さんを少し擦つただけで草むらへと姿を消した。

(・・・まあいいーー)

俺はすぐさま体勢を建て直し、この場から離脱しようとするが、それも無駄に終わった。

「隠れどりで出てこよか」

小此木さんの銃口が、しつかりと俺を捉えていたからだ。

両手をあげながら、俺は立ち上がる。

「小此木さん、わかっているんですか？あなたは今」

「離見沢症候群にかかるとるんやね？」

・・・・・まさかこの人、自覚症状があるのか？

「喉の辺りが無性に痒いし、まわりが全員敵に見える。ここつは、離見沢症候群の症状とピッタリ当てはまるわな」

「そこまでわかつてて、なにでこなすことをー？」

「わかつてることだからだらうねえ。今はとっても自分を抑えられる気がしないんよ。だからわあ・・・・・死んでくれんかね」

そう言って、小此木さんは銃の引き金をゆっくりと引いた。

俺は死を覚悟して目を瞑る。

ガキインッ！

銃声の直後に、鉄と鉄がぶつかり合つての音が響いた。

ゆつくりと目を開くと、そこには、白っぽい服を来た死神が立っていた。

「れ、レナ！？」

俺は、驚きながらその死神に声をかけた。

大きな労 なた を手に、
楽しそうに笑つて いる その姿はまさに、
死神を彷彿とさせる。

「圭一君、言いたいことは一杯あるが、とりあえずそれば後回しだね」

レナはそう言ひつゞ、小此木さんに刃を向けた。

「残念だつたね。この勝負、レナたちの勝ちだよ」

「ああ？ 何を言つて――――――後ろを向いてください」

突然の声に後ろを振り向いた小此木さんの顔をめがけて何かが飛んで、見事に直撃した。

顔を押さえながら蹲る小此木さん。
うずくまる

「おーっほほー！ワタクシの“特性キムチボール”的威力はいかがですかー！」

「みー、キムチの他に辛子、唐辛子、ワサビなど辛いものがたくさん入ってるんですよ。」

「あうあうあうー！ 考えただけでも恐いしこのです。梨花と沙都子は鬼なのです、悪魔なのですうー！」

ガサガサと、草影から梨花ちゃん、沙都子、羽入が姿を現した。

「ぐううーーー、貴様うアーーー！」

「おおーと、部長である私のことおもひれてもうひやあ困るねえ！」

トジメ、とばかりに、魅音が小此木さんの頭に銃を突き付ける。

「ひうの部活メンバーに手出したら、タダじゃおかないとよ？」

小此木さんはグッと唇を噛み、手に持っていた銃を下へ落とした。

「うやうやしき参のよひだ。

「えいこー、来たんだよッーーー！」

そんな光景を見ていた俺は、思わず声を荒げる。

誰も傷ついてほしくない。

だからみんなには話さなかつたの!ー

「圭一君、どうしてそんなこと聞くのかな?かな?」

「なんでお前…………俺はただ」

「ならなんで、圭一君はここにいるの?ー

レナは俺にグツと顔を近づけてきて、睨んでくる。

「俺はいいんだよ!ー!けどみんなは」

パンッ!

レナの右手が、俺の頬を勢いよく叩 はたいた。

「圭一君がよくて、レナたちがダメな理由って何かな?もしかして、レナたちじや役不足?足手まとい?」

「……そ、そんな」とは

「ならなんで圭一は一人でこんな危ない」としてるのかな?説明で
きる?」

「そ、それは……みんなに傷ついてほしくないから……

「圭一君は、傷ついてもこいつでハート~そんなの、ただの血口満足
HGT だよね?」

「そうだよーそれの何が悪いってんだー!」

「圭一君は何もわかつてないね。わかつてないよ……
けどそれなら、レナたちがここに着たのもただの血口満足 HGT
つて言えば、文句はないよね?」

「レナ……」

俺はレナの言葉に、思わず泣きだくなってしまった。

なぜなら、レナが本当に喜ぶとしたことが解ったから。

ただの血口満足 ハハ。

自分で言つてなんだけど、なんて卑怯で優しく言葉なのだらうか。

「圭一、ボクは誰が欠けても惨劇を打ち破れたことにはならないと思つのです。だから、その・・・・・・約束を破つてしまふなんさいなのです」

「あらあら羽入。謝ることなんてあつませんわ。全では身勝手な圭一さんが悪いのですから」

「やうだよ。多分、羽入が話してくれなかつたら、つむぎは一度と圭ちゃんと部活が出来なくなつてたかもなんだし」

「羽入、今回だけは感謝するのです。惨劇に部活メンバー抜きで挑もうとしたお馬鹿そんな圭一には、何かしてもらわないと気がすまないのです」

「はうう。れ、レナは圭一君を一田中撫で撫でたりしてみたいかな、かな」

「レナ、残念なのです。さつせせーを殴った時点ではレナの好感度は急降下なのですよ。」

「は、はう！？け、圭一君「メンねーつい、殴つちやつたんだけど、別に嫌いだからとかじやなくて」

「…………ああ」

俺は慌てふためくレナの頭の上に手を置いて撫でる。

「みんな、ありがとな」

今のは会話で、みんなが言いたいことが伝わった。

皆の捻ひねくれたような言葉の中に感じたのは、まるで春のひだまりのように暖かい、そんな思いだ。

勘違いかもしれないけど、でも、"ここにみんながいる" それが何よりの証拠だろ？

「ツー！レナ！危ない！」

突然、魅音が叫んだ。

俺の目に映つたのは、最後の抵抗とばかりに銃を捨い、それをレナに向ける小此木さん。

俺に出来ることはただ一つ、それは、誰も傷つけさせないことだ。

パンツ！パンツ！！

静かな森の中に、一発の銃声が鳴り響いた。

其の五 終幕（後書き）

誤字脱字あつたら報せよひじへお願いします

其の六 終わりの始まり

はんだだ?

暗くて寒くて・・・・・そうか、
そういうば俺は小此木さんに
撃たれて・・・死んだ、のかな？

まあ、たぶんレナは守れただろうし、惨劇に打ち勝つことは出来たと思つ。

みんなに、特に梨花ちゃんに未来を「かる」とがのはかなり嬉しい。

その場に俺だけいないのは少し寂しいけど、まあ、それが俺の運命なんだろうな。

さて、なんか眠くなつてきたり、寝ようかな。

たぶん田を瞑ればすぐにでも見れるはずだ。

・・・・・みんな、おやすみ。

——なんだ？ 急に眩しくなつて。

俺は渋々目を開く。

と、暗い闇のなかに、小さな光が見えた。

それはとても小さいけど、太陽のよつに暖かくて。

瞬間。

光は闇を全て包み込み、破裂した。

「・・・・・いち・・・・・圭ーー！」

「な、んだよ…………どうした？そんな顔してさ」

目が覚めると、まず視界に飛び込んできたのは梨花ちゃんの泣き顔だった。

年相応の女の子の子のようこ、顔をくしゃくしゃにして泣いている梨花ちゃん。

一体、何がどうなってるんだ？

「魅音ー・レナー・圭ーの目が覚めたのですーー早く、早くするのですーー！」

近くで羽入のはしゃいだよくな声が聞こえた。

「け、圭ーちゃんーー！」

「ぐお・・・・・痛いぞ、魅音」

寝ている俺に、突然抱きついてくる魅音。

その顔は、歡喜のせいなのか、満面の笑みである。

田にまたさんの涙をためて、梨花ちゃんと同じく魅音も泣いていたことが窺えた。

「…………圭一君、よ、よかつたあ」

そんな魅音と梨花ちゃんの後ろで、ゆづくつと涙をこぼし始めるレナ。

…………なるほど。

なんとなく状況が解つた。

俺は小此木さんに撃たれて、んで病院に運ばれて、で、部活の皆コイツらは俺を心配してくれて。

そんで安心して泣いている、と。

…………まつたぐ、なんて仲間想いの連中なんだ。

「大袈裟だなあ」

俺は呟きながら天井を仰いだ。

なんかつられて泣きたくなつちまつたじやねえか。

念のため、唯一まともに喋れそうな羽入に質問してみる。

「なあ、羽入。今日は何月何日だ？」

すると羽入はにっこりと笑いながら答えた。

「あう。今日は7月4日。誰がなんと言おうと、紛れもなく7月4日なのです！」

7月4日。どうやら俺はかなりの間寝ていたらしい。

まあ、今はそんなことよりも。

「…………おめでとう」

そう言ひて、梨花ちゃんの頭を撫でた。

みづやく惨劇に打ち勝つたのだ。

祝福の言葉へりて、言わせてもりづばー。

「・・・・・馬鹿」

そう言いながら顔を赤くして目を逸らす梨花ちゃんを見て、俺は思わず微笑んだ。

目が覚めた俺は、羽入に監督を呼んでもらって、ことの顛末を聞いた。

俺が撃たれたのを見たレナが小此木さんを半殺しにしてしまった以

外は、わりと穩便にことが進んだと言つてもいいだろう。

小此木さんは緊急入院。退院後逮捕予定。小此木さんに加担していた山狗の面々も逮捕。鷹野さんは、離見沢症候群の症状が和らいだ後、自首をした。

証拠はなかつたのだが、自分が殺してしまつた人に対するせめての罪滅ぼしと書いて、自ら富竹さんに両手を差し出した。

沙都子と詩音は、寝たきりの悟史に会つ許可をもらひ、涙ながらに再会を果たしたそうだ。

とりあえず、俺が撃たれたこと以外はあまり被害も出さずに、長年梨花ちゃんを苦しめてきた“惨劇”は幕を閉じたのだった。

8月7日。

空は雲一つない晴天。

外では煩うるさいくらい、蝉たちが歌を唄つてゐる。

そんなありふれた夏の日に、俺はやつと退院できるようになった。

脇腹と肩。

銃の弾が貫通したその場所に多少跡が残るも、部活のみんなや色んな人がお見舞いに来てくれたかいもあり、全て完治した。

「んん」つ！

入江診療所の入り口から外に出た俺は、雛見沢の空気を思い切り肺に流しながら、白のカツターシャツを揺らしつつ伸びをする。

「じやあ監督。お世話をなつました！」

「はい。前原さんもお元気で。体には気を付けてくださいね?」

「はいーんじやあ鷹野さんも富竹さんも、また」

鷹野さんは、自首したところと、富竹さんの口添えもあって現在は釈放されている。

「はつはつはー圭一君、例の件については完成次第連絡するよー。」

「もう次郎さんったら・・・・それじゃあ、また遊びにきてね、圭一君」

俺はにっこりと笑みを返すと、約2ヶ月ぶりの白毛へ向けて駆け出した。

「たつだいまーーー！」

・・・・・・・・・・・・・・あれ？

玄関のドアを勢いよく開いたまではいいが、俺はそのまま動きを停止させた。

こんな真つ昼間に誰もいなってのは、さすがにおかしいからだ。

「母さん・父さん・」

返事は・・・・ないな。

「あれ？ 買い物にでも出かけてるのかな？」

俺は首を傾げつつ、とりあえず家のなかへ上がることにした。

「・・・・・・・・まじかよ」

キッチンの方へ行つた俺が見たのは、信じられないものだった。

『懸賞で世界旅行が当たつたので、しばらく留守になります
母より P・S・レナちゃんたちとの仲の進展を期待して
わよ』

「・・・・・・・・・・・・・・人は入院してたつてのに、何してんだあの両親は」

呆れ半分、連れていつてもうれなかつた悔しさ半分を込めて呟く。

「てか、退院早々自炊か……。鬼畜すぎるだろ」

「俺はこれから的生活に一抹の不安を覚えつつ、大きくため息をついた。

「つて、冷蔵庫も買い置きのインスタント食品もゼロかよ……。」

とりあえず昼飯に何か食べようと冷蔵庫を開くと、中身はカラっぽ、つこでにインスタントラーメン等も底をぬきていた。

まじで鬼畜だな。よし、覗とじて父さんのHロゴンクションの存在を母さんにチクわへ。うん、それがいいな。

俺は父さんへの復讐を心に誓いつつ、書き置きと共に置いてあつたお金の入つた封筒を手にとる。

ちなみに、封筒の中身は1万円札が一枚と郵便局の通帳だった。

通帳の金額から察するに、かなりの期間戻つてこないつもつりしき。

本当、何考えてんだよ…………。

俺は再度ため息をつき、食品の買い出しのために玄関へ向かった。

「…………むむむ。安いけど調理するのもんじいしなあ…………」
「はやつぱりカップラーメンで」

「ダメだよ圭一君」

家から一番近いスーパーに来た俺は、悩んだ末にカップラーメンを買おうと思い立った矢先、後ろから聞き覚えのある声が。

「…………レナ、一体何してんだ？」

俺がそう質問すると、レナは首を傾げながら微笑む。

「たまたまですよ、だよ？」

「そ、そりゃだよな。」この辺りのスーパーってココしかないし、偶然だよな、あははは

いや、実を言うとめっちゃ焦った。

何故なら、『今』俺には他の世界での記憶があるわけで。

その中には、レナが俺をストーカーする的な世界もあったからだ。

いやあ、あの時は本当に怖かったなあ。

「・・・・・圭一君、レナに向かいたいことがあるんじやないのかな？かな？」

と、レナが俯うつむきながらそんなことを聞いてきた。

「へ？俺は別に・・・・・・」

いや、待て。このパターンはまさか・・・。

「・・・嘘だ」

つて、アレ?

予想してた言葉返つてきたのはいいが、迫力がないな。

「圭一君、ずっとレナから距離をとつてゐる」

「うつ・・・それは、他の世界のレナがあまりにも病んでたからしようがないだろ?」

「レナ、何かしたのかな?圭一君が嫌がるよつなこと、こつのもこかしちゃつてたのかな?」

「いや、だか、だか、わけじやあ

「でも、なら何で圭一君はレナと距離をとつとするの?レナは、レナは」んなにもほう!?!?」

涙目になりながら俺を見つめてきたレナの頭を、俺は知らないうちに撫でていた。

確かにそうだよな。

この世界のレナには、何も関係ない。

なのに俺は、この世界のレナを見ることをせずには、勝手に過去の瘤しがらみにとりられて。

「悪かったな」

で済むだけの心を込めた言葉。せつとレナは、悩んでいたに違ない。

だから、せめて慰めてやるへりこはせつてやつたよな。

「…………うん。大丈夫だよ？」

レナはどこかすつきりしたように笑った。

「レナが“他の世界で”圭一君にしたことば、確かに少しばかりかっ
たかもだし

そして、レナのその発言から知ることになる。

他の部活メンバーも、何故だかわからないが、他の世界の記憶を持
つていることに。

「…………少し、ねえ

そんな俺の呟きは、スーパーの特売を知りせぬ放送によってかき消
された。

其の六 終わつの始まつ（後書き）

「都合主義よろしく、離見沢の惨劇をちやつちやと終わらせました
とつあえず、これからが本番の予定です あ
誤字脱字があれば指摘よろしくお願ひします

其の七 アグレッシブな（前書き）

ちゅーー。この話は作者の妄想で出来ていますので、心臓が悪い方、お子さま等は戻るボタンでお帰りください。

其の七 アグレッシブレナ

「つて、確信犯かよつー。」

「えへへー」

「えへへ、じゃねえーー！」

レナにも他の世界での記憶があるとカミングアウトされた、スーパーからの帰り道。

俺は、先ほどより凄いカミングアウトをされた。

だつてレナのやつ、やつぱり俺をストーカーしてたみたいなのだ。

俺が診療所を出るとこりからずつとストーカーされてたわけだから、考えるとゾッとした。

その、ゾッ、が自分の鈍い勘に対するものなのか、レナ自身に対するものなのかはよくわからないんだが。

「つか、なんで俺のことストーカーするんだよ」

「だから、ストーカーじゃないんだよー監視なの、監視……」

レナが言つには、俺が変なことをしないよつて監視をしてる、ということなのだが、変なことつて何だ?

「そんなのしなくて、俺は変なことなんてしないから安心しりつて」

「だめだよ。圭一君が無茶して、死んじゃつたりしないよつて、今度はレナが圭一君を守るんだから」

「……無茶で死ぬ前に、レナから殺されそうな気が……」

「圭一君、今、何か言つたかな?かな?」

「なんでもないです」

レナがすんじい顔で睨んできたので、ブイツと舌つぽを向く。

つかレナのやつ、自分のせいで俺が撃たれたこと、まだ気にしてるんだな。

・・・・・まあ、俺がレナの立場なら、今のレナと同じようなことをしたかもしれないが。

「それにしても腹減ったなあ～」

そろそろ限界に近いお腹を擦りながら、手に持つビニール袋の中を見る。

そこにはインスタント食品の影すらなく、『体にいいから』といつ理由で、強制的に生野菜や生肉のパックなどが詰められている。

確かにこいつの方がインスタントより体にいいだろうが、料理なんて出来ないぞ？俺。

ちなみに、レナには両親のことではなく内緒にしてある。

もし知つたら、レナのことだから何を言いだすか解つたもんじゃない。

「でね、圭一君。今日の晩ご飯はカレーでいいかな?かな?」

「ああ。カレーは大好物だからな…………って、何言つてんだ!?」

突然のレナの言葉に思わず返答してしまつも、その意味を理解して大きな声を出してしまつ。

「だつて、圭一君のご両親、旅行に行つてていなんじょ?圭一君、自分でご飯作れるの?」

「……なんでそれを知つてんだ?まさか、人の家の中に勝手に侵入したりとか」

「ち、違うよおー!レナ、まだこの世界では圭一君の部屋に無断で入つたりしてなんだから!レナは圭一君のお母さんに、面倒見るようになって頼まれただけなんだよ、だよ!」

「…………この世界では”つてのが無性に氣になるが、ま、まあいい。俺の寛大な心でスルーしてやろ!」

てか、母さんが手紙に書いてた『P・S』の意味がよひやく理解できたぜ……。

「まあ、こじけだぞ。でも、レナの父さんとかは『気にしない』で大丈夫なのか？」

「大丈夫大丈夫。ちゃんとお父さんにも許可もらつてあるし」

「……許可？」

「うそ。あ、そういうえばお父さんが、『その内、圭一類で子とゆつくつお話ししたいなあ、あはははは』とか言つてたよ？」

「レナ、お前まじで鬼だな……」

俺は、レナの父さんから“お話し”されるのを想像してげんなりした。

「鬼つてのはあんまりじやないかな、かな？」

「いや、ぴつたしあ似合ひだら」

「むむ……今日の圭一君、意地悪だよね」

「誰のせいだ誰の…………ってか、まじで飯作りに来てくれるのか？」

実際俺じゃ味噌汁すら作れないし、作ってくれるのはかなり有り難い。

「うん、作りに行く。…………あ、荷物はちゃんとあるから大丈夫だよ」

そう言ったレナは、先ほどから持っていた大きなカバンを俺に見せてきた。

いや、気付いてたさ。スーパーに行くにはやけに大荷物だなあって。
「そんな大荷物持つて、鍋なんかするのか？」

俺がそう言つと、レナは照れたように頬に手を当てながらはにかんだ。

「違うよ。これはレナが、圭一君の家にお泊りするための道具だよ、だよ？」

…………あー、待て。何かとても不吉な單語が聞こえたよつた。

「すまん、もう一度言つてくれ」

「だから、レナは今田から圭一君の家でお世話をなつますー。」

そんな、漫画やアニメでしか聞いたことのない台詞をやひつと吐いたレナを見ながら、俺は呆然と立ち尽くすことしか出来なかつた。

「…………さうあるよ俺

俺は一人、居間で苦惱する。

確かに、レナが家に泊りに来るなんてビックリハプニングは起きたが、まあ、嫌なわけじゃないし、むしろ嬉しいくらいだからいいと

しょ♪。

先ほど食べた晩ご飯のカレーも美味かつたし、デザートに出たフルーツヨーグルトも美味かつた。

そんないいことづくめの中で、俺が何に苦惱しているかと言へば・・・
・・・もう、みんな察しがついているよな。

そつ、家には俺とレナだけ。

そして、当の本人のレナは現在、入浴中なのだ。

わかるだろ？

覗きたくなるつてのが男の性 さが つてやつだ。

しかし俺は紳士である。

そのようなことをしていいのか、と、頭の上で天使と悪魔が大乱闘をしているのだ。

『断固としてダメだ！今まで培つてきた信頼が崩れてしまつじゃないか！』

『何を言つてゐる！ うせつて泊りにまで来てるつて云は、つまりそつこことなんだよ。』

悪魔の言葉に、俺の心が揺れた。

そうだよな、こりこりのつて、少しくらい口チックなハグニングが起きるのが定番だよな。

俺のなかの天使は死んだ。

「ぐふふふ・・・・・・いや、ここまちやんと偶然を装わなければ・

・・

逸はやる気持ちを抑えつつ、俺は風呂場へと足を進める。

さあ、桃源郷はもうすぐそこだ。

「・・・・・・・・・・・・・・」

風呂場へと続く脱衣場の前で唾を飲み、深呼吸をする。

「アに手をかけ、桃源郷への第一歩を踏み出していく。それは一気に冷めた。

色で叫うならピンクから青い。

なぜならば、脱衣場には着替えと共に一本の鋭いナタが置いてあつたからだ。

覗いてしまった場合の光景が頭に浮かぶ。

『あはははは、圭一君、少しあ仕置きしないとだね』

ジーザス・・・・・H口の神は俺を裏切りやがった。

絶望に染まる思考を切り替え、俺は自分の部屋へ逃走する。

「大丈夫さ。この昂ぶった気持ちは俺のコレクションが晴らしてくれ

そう呟きながら部屋に飛び込むと、無残にゴミ箱へ突っ込まれた口

レクションの数々が。

「な、なんじやこりやああああああああああああああ！」

俺の叫びは、雫見沢の夜にこだました。

「ううう・・・・・俺はこれから何を生き甲斐にして生きていけばいいんだ・・・・」

俺は床に膝をつきながら落ち込む。

ああ、犯人らしき人物は一人しか心当たりがないな。

レナのやつ、一体何の恨みがあつて俺のコレクションに手を出したんだ？

「圭一君、お風呂上がりがつたよ…………つて、アレ?何してるの?
?」

「…………何つて、お前こそ何なんだよ…

「…………ああ、そのえつちな本のことなのかな、かな?」

「もうだよー人の許可なく、『』箱に突っ込みやがって!」

「…………だつて、…………だもん

「ああー?聞こえねえよー!」

「だつて、その本の女の子たち、髪が長くて胸も大きくて、レナとは全然違つんだもん!…」

「…………は?お前何を言つてぬわあつー?」

突然、レナが俺に飛び掛かつてきた。

「いててて……レナ、いきなり何を

ぶつけた頭を撫でながら、閉じた手をゆっくりと開いて、俺は驚愕した。

二つの間にか、レナは俺の上に馬乗りの状態になつて座っていたのだ。

しかも、風呂上がりなのでレナからして、匂いがして鼻孔をくすぐる。

「レナ、言つたよね？ レナにもずっと昔からの記憶があるって。どの世界のレナも、だいたいの確立で圭一君にある感情を抱いてたんだよ？」

「ある、感情？」

「うん。前の世界のレナも、その前のレナも、そして現在 いまのレナも、圭一君のことが……大好き、なんだよ」

風呂上がりの熱さのせいか、はたまた別の何かか、レナの顔はまるみるうちに紅く染まっていく。

「だから、ね？レナ、何でもするから、どんなことでもするから、圭一君にはレナのことだけを見ていてほしいの。大丈夫だよ、ライバルは多いけど、レナ、勝つてみせるから」

突然の告白に、動きを止める俺。

（女の子から、レナから告白された！？）

頭のなかではその言葉が無限にリピートされ、俺は近づいてくるレナの顔を、ただただボーッと見つめることしか出来ない。

重なる脣。

初めてのキスは、緊張のせいか何の味もしなかつた。

「今日は、ここまでかな？」

レナはそう言い残して、顔を真っ赤にしながら俺の部屋から出ていった。

「・・・本を捨てた理由、結局聞きそびれたなあ」

天井を仰ぎながら、俺は小さく呟いた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1501m/>

ひぐらし・・・の？

2010年10月20日13時14分発行